

山 添 村

～みんなが住み続けたい村の実現へ～

奈良県北東端の大和高原の一角に位置する山添村は、奈良県を代表する大和茶の産地として発展してきた。しかし過疎化による人口減少と若者の流出、高齢化や後継者不足による大和茶の生産量の減少と耕作放棄地の増加など様々な問題を抱える。そうした中、村は村民、議会、行政が「和合結束」し、「元気で、夢や生き甲斐が持て、安心して暮らせる村」の実現に向け、課題解決に取り組んでいる。

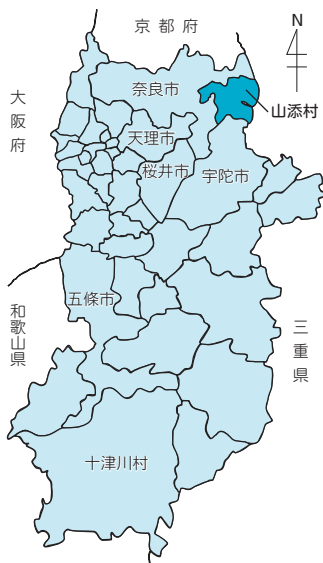
I 概要

1. 地理と歴史

山添村は奈良県の北東端、大和高原の一角に位置する人口 3,226 人（県内 39 市町村中 29 位）、世帯数 1,110 世帯（同 30 位）、面積 66.52km²（同 15 位）の村である。（総務省「国勢調査 人口等基本集計」（2020 年））。地勢は標高 120～620m で起伏に富み、ゆるやかな傾斜地が多い。東部は三重県伊賀市及び名張市、北西部は奈良市、南部は宇陀市に接している。村内を名阪国道が縦断していることから、車を利用すれば大阪市内へは約 1 時間、名古屋へは約 1 時間 30 分と、豊かな自然に恵まれながらも都市部に近い。また、村の面積の約 80% を山林が占めており、その山間からの清らかな流れはのちに木津川へと注ぎ、この流れに沿って 30 の集落と農地が点在する。

村の歴史は古く、
ぬのめ 布目川、おそせがわ 遅瀬川、
なばり 名張川、かさま 笠間川等
の流域では、発掘調査によって縄文時代の遺跡や遺物が数多く出土するなど太古から生活が営まれていたことが確認されている。また、奈良時代に建立された際の礎石が当時のま

山添村の位置図



ま残る^{けはらいじ}毛原廃寺や、僧・行基が開基したと伝わる^{こうのし}神野寺など、深い歴史を持つ村である。

1956 年 9 月に添上郡東山村と山辺郡波多野村、豊原村の 3 村が合併し、現在の山添村を形成し、2016 年に立村 60 年を迎えた。

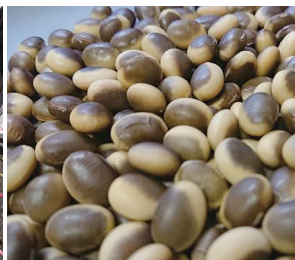
2. 産業構造

従業地による就業者人口（15 歳以上）の産業別割合を見ると、第 1 次産業が 22.7%、第 2 次産業が 27.2%、第 3 次産業が 50.1%と、奈良県全体（順に 3.4%、22.2%、74.4%）と比べて第 1 次・第 2 次産業の割合が高く、第 3 次産業の割合が低い（総務省「国勢調査 従業地・通学地による人口・就業状態等集計」（2015 年））。

第 1 次産業の中でも、特産品である大和茶の栽培が以前は盛んであったが、現在は生産者の高齢化や後継者不足による耕作放棄地が増加している中、生産量の減少が大きな課題となっている。こうした中、村では大和茶以外の新たな特産品として地域で古くから生産されているが生産量の少なから市場に流通してこなかった農産物の「片平あかね」や「まめくら大豆」の生産量の拡大と知名度の向上に力を入れている。



根の先まで真っ赤な細長いカブ「片平あかね」



茶色とクリーム色のツートンカラーの「まめくら大豆」

3. 人口構造

村が誕生した 1956 年には、8,082 人であった人口は、2020 年には、3,226 人と減少を続けている。年齢階級別人口移動を見ても、男女共にほとんどの年代において転出が転入を上回っている（総務省「国勢調査 移動人口の男女・年齢等集計」（2015 年））。

特に 15 歳～29 歳で転出超過が大きくなっており、これは、就職や結婚といった一般的な要因に加え、村外の学校への進学を機に転出するケースが多いものと考えられる。



山添村マスコットキャラクター「からす天狗の『てんまる』」

Ⅱ 村の活性化に向けた様々な取り組み

2021 年 9 月の村長選挙で初当選した野村栄作村長のもと、『和合結束』を第一に掲げ、課題解決に取り組んでいる。

1. 教育環境の整備と取り組み

現在、村内にある保育園・小・中・高（分校）の園児・児童・生徒数は、年々減少している。そこで村では村内外の子供たちが村の学校への進学に魅力を感じられるよう、少人数制を活かした独自カリキュラムの作成など、課題解決に向けた様々な取り組みを進めている。

①保育園を統合し認定こども園へ

村内にある 3 つの保育園を統合し、認定こども園として 2024 年 4 月の開園を目指す中、村では「山添村立認定こども園建設検討委員会」を立ち上げ、広く保護者や村民からの意見を聞きながら特色ある保育と教育環境の整備を進めていく予定だ。

②保育園（認定こども園）・小学校・中学校の連携を推進

小・中一貫の義務教育学校を目指しており、それにより保・小・中学校の連携した独自のカリキュラム編成が可能となり、子供たちの学びの連続性が確保できる。さらには、中学校進学の際に、新しい環境での学習や生活に馴染めない「中 1 ギャッ

プ」の緩和も期待される。今後は、保育園から英語教育を導入し、グローバル社会に対応できる子供たちの育成にも力を入れていく。

③学校のデジタル化

村では国が進める GIGA スクール構想に対応するため、教室への電子黒板と短焦点プロジェクターの設置や、デジタル教科書での授業など早くからデジタル化に対応してきた。2021 年には、村の全生徒に 1 人 1 台タブレット端末が配布され、小学校 1 年生からタブレット端末を授業で積極的に活用している。今後はデジタル化によるさらなる学習効果の向上を図るため、教員のスキルアップや生徒への ICT 教育の推進に取り組んでいく。



山添村立山添中学校 リモート交流の様子

④少人数実学教育

少子化が進む中、子供たち 1 人 1 人の能力にあったきめ細やかな指導の実現や、机上の教育だけではなく、「自然」に触れる体験学習にも力を入れることで、少人数実学教育を基盤とした様々な学びに取り組んでいく。特にふるさと山添村の良さや歴史について深く学ぶ「（仮称）山添科」の導入により、村への愛着を育む機会が増えることが期待される。

○社会科副読本の作成

これまで村の小学生は、村の歴史や地理、産業などについて学ぶ郷土学習の教材として副読本「わたしたちの村」（月ヶ瀬村・都祁村・山添村の 3 村合同で作成）を使用してきたが、2005 年 4 月、月ヶ瀬村と都祁村が奈良市と合併したことにより、その後は教師が独自の教材を作成し対応してきた。そこで村では子どもたちが自分たちの村について知り、学び、考えることができる統一した副読本

を作成するため、2021年11月プロジェクトチームを立ち上げた。

このプロジェクトでは、冊子だけでなく記載のQRコードを読み取ることで、より詳しい内容を見ることができるデジタル本としても活用する予定となっている。村内の小中高生だけでなく村民全員に読んでもらい自分たちの暮らす村を村外の人に自慢できる「山添愛」を育んでもらうことを目的とし、まずは2023年4月から小学校への冊子の導入を進める予定だ。

2. 安心して住み続けられる村をつくる

○防災行政アプリの導入からはじまる、人にやさしいデジタル化の推進

国が行政のデジタル化を推進する中、国と歩調を合わせ、村でも行政サービスのデジタル化に力を入れている。現在村民が防災情報や行政情報を得る方法は、村のHPや11チャンネル（自治体放送）、防災行政無線などに限られている。防災行政アプリは、役場からの情報を即座に収集できるというメリットがあり、普段から携帯しているスマートフォンを活用することで、効果を更に発揮する。

将来的には、買い物代行やデマンド型交通などの事業と連携をはかり、生活の利便性が格段に高まるような村づくりをしていきたい。

現在村では、タブレットやスマートフォンを使い慣れていない高齢者に向けて、スマートフォン教室を無料で開催しており、高齢者のデジタルデバイド解消に努めている。

○移住・定住促進

前述のとおり大阪や名古屋へ1時間から1時間半という好立地から、移住に関する問い合わせが年々増加している。そのため村では移住希望者に対するワンストップ窓口を整備し、サポート体制を整えている。空き家バンクに登録されている空き家の改修費の2分の1（1回限り、上限200万円）を助成するほか、福祉や子育てについても手厚い補助制度を実施している。また、「農地バンク

制度」※を活用し、村外の営農希望者に農地を貸し出す制度など、移住・定住を希望する人が安心して暮らしていけるよう様々な取り組みを行っている。

※農地バンク…遊休農地や所有者が管理できなくなった農地を登録し、村の仲介により農業を始めたいと考えている人へ紹介する制度

3. 産業振興への取り組み

○大和茶の活用と和紅茶の栽培

大和茶栽培の歴史は806年、唐から弘法大師が茶の種子を持ち帰ったことから始まったと言われている。特に大和高原一帯は、昼夜の寒暖差が大きいため美味しい茶葉が育ち、日本でも有数のお茶の産地として発展してきた。大和茶は中心的な産業として村の発展を支えてきたが、現在は生産者の高齢化や後継者不足のため茶園の多くが放棄茶園に姿を変えてしまった。こうした現状を変えるため、村では次のような活動を行っている。

①茶の実オイル研究所

茶の実オイル研究所は、廃校した小学校を地域再生の拠点として開放する「東豊ベース」で活動する団体。年々増加する放棄茶園の管理や、茶の木や枝を使った炭作り、茶の実から搾油したオイルを使った商品開発を行うなど地域の雇用創出にも力を注いでいる。



茶の実オイル研究所のロゴマーク



茶の実から搾油した茶の実オイル

②かすががーでん



茶摘み体験の様子

大和高原では明治時代初期から「和紅茶」（日本国内で栽培した紅茶の総称）の栽培が盛んに行われており、村史には

1958年にイギリスで行われた紅茶品評会において、村で栽培された和紅茶の適合品種「べにほま

れ」が最優秀賞を受賞したことや、当時紅茶園があったことが記されている。「かすががーでん」は、茶摘みから加工までを体験するお茶作りや、農村文化に触れるイベントなどを数多く開催している廃園した保育園舎である。この場所をベースに農業や和紅茶の魅力を広め、地域農業の担い手の育成などにも力を注ぐ他、海外からの輸入紅茶の増加で生産されなくなった幻の品種「べにほまれ」の復活プロジェクトにも取り組んでいる。

○羊まると活用プロジェクト

村内にある羊の観光牧場「めえめえ牧場」の羊を活用した新たな雇用や産業の創出を目指すプロジェクト「羊まると活用プロジェクト」を奈良県と共に進めている。このプロジェクトでは、これまで牧場の活性化や除草のために羊を貸し出す「草刈り隊派遣事業」などを行ってきた。2022年3月、新たに羊肉の活用事業を始めることを同村の



考案された羊肉料理

レストラン「^{えいざん}映山^{こう}紅」で発表した。これまで試験的に食用羊を飼育してきたが、今後は村の特産品である大

和茶入りの飼料を与えた羊を「大和羊」としてブランド化し、安定した生産体制の確立を目指す。5年後には肥育数を年100頭まで増やすことを目標にしており、村に新たな産業と雇用が創出されることが期待される。

4. 観光振興にかかる取組み

○^{こうのやま}神野山

つつじの名所としても知られる神野山（標高618.8m）は、県指定名勝・県立月ヶ瀬神野山自然公園に指定されている。山頂の展望台からは、360度の眺望を楽しむことができ、春には色鮮やかに咲き誇る



神野山のつつじ

つつじを楽しむために多くの人が訪れる。また、最近では星空の鑑賞ポイントとしても注目されており、8月には「星空のつどい」などのイベントが開催される。また、山腹には740年に僧・行基によって開かれたと伝わる「神野寺」があり、同寺の薬師如来像は行基が自作奉安したと言われ、今



神野寺

も県外から多くの参拝者が訪れる。今後はこうした豊かな資源を守りながら、宿泊施設や移動手段を整備し

交流人口の促進に力を注いでいく。

○^{なべくらけい}鍋倉溪

神野山の中腹にあり、大小の黒い岩が長さ約650m、幅約25mに渡ってまるで川の流れるような不思議な景観を作り出している鍋倉溪は、岩の黒くすすけた色が鍋の底を連想させることが名称の由来と言われている。この岩の下地の層深くに水が流れており、姿こそ見えないものの耳を澄ませるとかすかに水音が聞こえる。



鍋倉溪

この珍しい地形には、青葉山の天狗と神野山の天狗がけんかをして石を投げあったという言い伝えなど色々な説があるが、実際はもともとの山肌が削られた際、特に堅い部分が風化に耐えて岩石のまま残り蓄積したものと考えられている。毎年8月にはライトアップが行われ、光に照らされた神秘的な姿を見ることができる。

同村では「すべての村民が村を自慢でき、村に誇りが持てる心『山添愛』を育めばそれが将来、村の魅力を活かし、課題解決をする力になる」との思いから、新たな取組みが展開されている。

（村井 渚、八木陽子）